

【海外学会報告】

2019 年度 第 21 回韓国ケベック学会 参加報告 21^e colloque de l'ACEQ (Association Coréenne d'Études Québécoises) Le dimanche 16 novembre 2019, Ambassade du Canada en Corée du Sud

去る 2019 年 11 月 16 日（土）、韓国ケベック学会（Association coréenne des études québécoises）第 21 回年次大会が、在ソウル・カナダ大使館エントランスホール Scofield Hall にて開催された（国際ケベック学会（Association internationale des études québécoises）および在ソウル・ケベック政府機構（Bureau gouvernemental du Québec à Séoul）による共催）。

このたび AJEQ 代表として当学会に参加する機会を頂き、戦後ケベック文学を代表する劇作家ミシェル・トランブレイについて発表を行ってきた。

1. 学会プログラム概要

今年度は「ケベック文学と文化における都市空間（Espace urbain dans la littérature et la culture québécoise）」というテーマで、5 名の研究者が登壇した。

第 1 部 開会の辞及び ACEQ 総会（14:00-14:30）／基調講演（14:30-14:50）

HAN Yong Taek（ACEQ 会長）

HEBERT Patrick（韓国カナダ大使館）

BOISSONNEAULT Valérie（在ソウル・ケベック機構）

LECLERC Catherine (Univ. McGill), « Créer l'urbanité : micrométropoles littéraires québécoises et franco-canadiennes »（フランス語）

討論者：LEE Min Joo (Univ. de Séoul)

第 2 部 発表①（15:00-15:40）／発表②（15:40-16:20）

MURAISHI Asako (AJEQ), « Michel Tremblay et l'imaginaire mythique de la Révolution québécoise »（フランス語）

討論者：KIM Hyeon A (Univ. féminine de Séoul)

CHOI Hye Lin (Bureau du budget de l'Assemblée Nationale), « L'économie sociale dans les villes québécoises » (韓国語)

討論者：KIM Jung Hyun (Univ. nationale de Kongiu)

第3部 発表③ (16:30-17:10) / 発表④ (17:10-17:50) / 全体討議 (17:50-18:30)
KIM Min Chai (Univ. Yonsei), « Des caractéristiques du parler montréalais à travers le rap » (韓国語)

討論者：BAE Jin Ah (Univ. Inha)

LEE Kaya (Univ. féminine de Sookmyung), « La trajectoire du groupe des études québécoises » (韓国語)

基調講演をされたマギル大学のカトリーヌ・ルクレール氏は、ご専門が文学における多言語主義とあって、ケベック文学に描かれる複数の少数民族・文化・言語が遍在・混在・共存する都市空間を、「micrométropoles (ミクロメトロポリス)」という概念を提示して読み解かれていた。様々な葛藤と相克を乗り越え、他者があるがままに受け容れるケベックの懐の大きさ、ケベックにこそ体现されている多なる一の理想が、文学作品から垣間見える発表であった。

またACEQ会員の発表は、韓国のケベック研究史をたどる発表のほか (LEE Kaya 氏、淑明女子大学校)、ケベック諸都市における社会運動と財政問題 (CHOI Hye Jin 氏)、またラップ音楽に見るモンレアルの口語表現についての発表 (KIM Min Chai 氏、延世大学校) など多岐に渡り、コーパスの広さに驚かされた。

とりわけKIM氏の発表は、LECLERC氏の発表にも通ずる内容で、大変興味深かった。ケベックにおける英語のヘゲモニーに着目し、フランス語擁護を貫くナショナリスト的な旧世代と、保守思想を排し *franglais* (フランス語と英語が混交した俗語) をアイデンティティの拠り所にする若者世代とのジェネレーションギャップを浮かび上がらせるもので、ケベックにおける言語をめぐる対立構造について、理解を深めることができた。

2. ミシェル・トランブレーにおける神話的想像力についての発表

私自身は自由論題の枠組みで、60年代の「静かな革命」を生きたミシェル・トランブレーの代表的小説連作『プラトー・モン・ロワイヤル年代記

『Chroniques du Plateau Mont-Royal』を扱った。作家がどのように虚構空間に神話を取り入れたかを検証し、政治的アイデンティティの casting の過程で、神話のイメージが共同体の礎として大きな役割を果たすことを証明した。作家が生まれ育ちその小説の舞台にもなったのは、モンレアルのかつての労働者街 Plateau Mont-Royal。ギリシャ神話の運命の女神パルクや聖書の黙示録など、神話のインスピレーションを受けたトランブレーは、現実の都市空間を壮大な叙事詩へと変貌させ、歴史の過渡期にあつて精神的先導者として、フィクションを通じた新たな世界のヴィジョン構築を企図していたのではないか。ケベックの作家の分析を通じて、因習の彼方に新しい時代を創出するという文学の普遍的な力を示せたのではないかと思う。

発表構成としては、学会が文学に特化していないため他分野の研究者への紹介の意味で、まず作家の伝記的背景と、バルザック、ユゴーなどのフランス人作家との比較から作風を概観した。

次に小説連作に展開する神話及び聖書のイメージ群として、運命の女神パルクと黙示録について分析した。トランブレーのパルクは、ギリシャ神話と異なり、人間の運命を支配する、厳格で冷酷無比な悲劇の女神ではない。機械的に采配ができず過ちも犯す人間的な女神、そして何より運命に翻弄され懊悩する人間に、歩み寄り見守り共感する慈悲深い女神、聖母に近いキリスト教的な女神像であることを証明した。

また終末を預言する黙示録は、トランブレーにとってまず、時代の変化に乗り遅れ凋落の一途を辿る、呪われた種族の命運を描き出す役割を担っている。それと同時に、フランス系カナダ人の歴史の終焉、つまり Québécois としてのネーションの再生とアイデンティティの再構築をも暗示している。このようにトランブレーは、神話的想像力を通じて、新しい世界観を人々に啓示してきた。その意識改革の弛みない努力こそが、時代の先駆者のもたらす福音＝良い知らせであると結論した。

当発表に対して討論者より受けた質問は、2点あった。まずユゴーの影響として挙げたロマン派的な「崇高」の概念について、簡単な言及に留めたこともあり、補足説明を求められた。そこでまず、悲劇と喜劇を峻別する古典演劇とは異なりロマン派演劇は、近代の多様な現実世界を描くためにジャンル区分を取り払ったという意味で、sublime の語源に忠実に、「limen (敷居)」を「sub (超え)」たことを説明した。またボードレルが、バルナス派の形式美を批判し、詩の倫理的射程を主張したことを述べ、ロマン派的「崇高」が、

ギリシャ的「崇高」よりキリスト教的「崇高」に近いものであることを敷衍した。

また2点目は、ケベック現代作家へのデリダほかフランス現代思想の影響に関してであったが、この点は発表者の知見及ばず回答を保留したので、今後の考察の課題としたい。

3. 今回の学会参加所感、ソウル探訪雑感

今回の学会で興味深かったのは、進行形式として、会場からの自発的な質問を受ける従来の質疑応答形式でなく、各登壇者に対し ACEQ 会員からそれぞれ対談者兼報告者が割り当てられていたことだ。対談者が発表内容のアウトラインをなぞりつつ登壇者に質問を投げかけるという形を取ることで、問題意識が共有しやすくなり、会場のリアクションも引き出し、活発な議論を促すのに成功していたのが印象的だった。

こうして知的刺激を大いに受けたのはもちろんのこと、人との出会いもまた、今回の学会参加の収穫であった。LECLERC 氏とは同年代なこともあり、ケベック事情・研究から人生観に至るまで、様々なお話を通じて親睦を深めることができた。またそのお人柄に惹かれた ACEQ 会長の HAN Yong Taek 氏、コーディネーターの PARK Heui Tae 氏を始め、会員の方々より温かい歓迎を受け、大変美味しい韓国料理も頂いた。

また市内観光ではソウルの方々に親切に道案内して頂き、方向音痴な私も大変助かった。そして何より王宮巡りで出会ったガイドさんたちの完璧な日本語には感服させられた。チャングムなど日本でも流行した韓流ドラマの逸話も交え王朝の歴史を詳しく説明して下さりとでも興味深く、近くて遠い韓国を知るきっかけになった。11月中旬のソウルは思いのほか冷え込み、さらにはあいにくの雨だったが、そんな寒さを忘れるほどの人々の温かさにふれた旅であった。

今回の学会参加を通じて最も嬉しかったのは、ケベックについて見識を深められたのは言うまでもなく、昨今の複雑な日韓情勢のなか、微力ながらこうしてケベックを橋渡しとして、両国の絆を深める一助となれたことである。学術交流を始め、こうした草の根外交を地道に積み重ねていくことで、両国の関係がよりよいものになってゆくことを願ってやまない。

最後に、こうした貴重な機会を下さった AJEQ 会長の立花英裕先生、丹羽卓先生、小倉和子先生、関未玲先生に心より御礼と感謝を申し上げて、報告

の結びとしたい。

(村石麻子 立教大学)